

フランス語会話モジュールの評価

時田 朋子

(東京外国語大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

1. はじめに

TUFS 言語モジュールは、東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の枠組みにおいて開発された。モジュールの開発は、第一段階が言語素材の開発、第二段階がウェブ化、そして第三段階が評価という、三段階をもって行われる(川口, 2004)。なお、TUFS 言語モジュールは、発音・会話・文法・語彙の四モジュールから成り立っている。

第二段階であるウェブ化が最初に行われた発音モジュールは、第三段階である利用者による評価がすでに実施されている(山森, 2004b; 藤原, 2004; 周, 2004 を参照のこと)。その次にウェブ化されたのは、会話モジュールである。第二段階であるウェブ化が行われてから 1 年以上経過し、利用者の評価という第三段階に進むことが可能となった。本稿は、会話モジュールに対する利用者の評価を明らかにすることが目的である。

フランス語会話モジュールは、東京外国語大学外国語学部フランス語専攻の 2 年生が受講する、ネイティブスピーカーによる会話の授業の教材として、2004 年度を通して使用された。学生は、授業参加はもちろんのこと、授業外においても毎回の課題をこなすためにモジュールを使用することが求められている。本稿は、モジュールの利用者であり、かつモジュールを使用したこの授業の受講者である学生を対象にして、フランス語会話モジュールおよびフランス語会話モジュールを教材とした授業に対する評価を行う。

教育評価とは、学習者の学習成果に対する評価と、指導者の指導に対する評価を指すが(山森, 2004a)、この両者を実施することにより、教育は改善される。前者の、学習者に対する評価は、授業担当者より授業やテストを通して、定期的に行われている。しかし後者の、授業担当者が学習者より体系的に評価を得る機会、あまり多くはない。指導には、学習者のニーズおよびそれに伴う学習目標を把握すること、また学習者および学習したスキルが活用されるコンテキストに関して考慮することが必要とされる(Dick et al, 2001)。そこで本稿は、学習者側からの授業評価を明らかにし、授業の改善を目指す。以下の 4 点から、評価を行う。

- i) フランス語会話モジュールは、学習者のニーズを満たす教材か。モジュールの機能、使い勝手、ダイアログについて、学習者はどのように捉えているか。
- ii) 授業教材として、フランス語会話モジュールはどのように活用できるか。
- iii) フランス語会話モジュールは、学習者のどのような能力を発達させることが可能か。

iv) モジュール教材はどのような学習者に向いているか。

以上の観点からフランス語会話モジュールの評価を行うことにより、モジュールをいかに改善するか、および授業においてモジュールはいかに効果的に使用できるかについて考察することが本稿の目的である。

2. 調査方法

以下では調査方法について、道具、被験者、分析方法の点より述べる。

2.1. 道具

フランス語会話モジュールの評価は、アンケートを用いて行った。アンケートの内容構成は大きく7つに分けられる。まず、アンケート実施の趣旨を説明した上で、データ分析に必要な個人情報の記入欄を設けた。その後は、4点からのモジュール評価である。1つ目は個人のフランス語学習に関する、2つ目は会話モジュールに関する、3つ目は授業に関する、4つ目はフランス語能力に関する質問である。回答はすべて選択式とした。最後に、「モジュール」および「授業」についての自由記述欄を設けた。

アンケートは、量的および質的データを収集しているため、混合アプローチからの分析となる。質問項目の作成は、フランス語ネイティブスピーカーである授業担当者より授業に関する説明を受け、また授業観察を行ったうえで行った。アンケート実施前に、授業担当者および授業評価の専門家より、質問項目の適切さおよび妥当性という観点からコメントをもらい、必要な箇所には修正を加えている。

2.2. 被験者

本調査は、東京外国語大学においてフランス語を専攻する学部2年生を対象とした。2005年1月26日の授業に出席した63人に対して（2004年度の最後から2回目の授業）、一斉にアンケートを行った。筆者の他にも、フランス語ネイティブスピーカーである授業担当者4人、および日本人のフランス語教員1人が教室にいた。この状況下、被験者は真剣にアンケートに取り組んだ。それはほとんどの者が、自由記述を埋めたことにもみることができる。

被験者は、2004年4月より、フランス語ネイティブスピーカーによる、フランス語モジュールを使用した授業を受講していた。これは水曜日の午前中に2コマ連続で開講される、必修の授業である。2年生全員は4クラスに分けられており、コマにより教師は異なる。授業の進め方は全クラス共通である。1コマ目はフランス語モジュールを使用した授業であり、2コマ目は1コマ目で扱ったフランス語モジュールに基づく発展的な内容の授業である。（詳細は、本書所収のルーセル・中田「TUFSS 言語モジュールを用いた授業」を参照のこと）

2-3. 分析方法

量的データは、SPSS ver.13.0 を用いて記述統計を行い、結果を百分率で示した。自由

記述は、アンケート項目に応じてコード化を行い、量的データの結果とあわせて分析をした。異なる質のデータを用いて得た結果を組み合わせる三角測法（triangulation）を行うことにより、分析の信頼性を高めることを目指した。また分析を深めるために、個人のフランス語学習に関する数値とクロス集計を行った項目もある。なおグラフは、Microsoft Excel 2003 を利用して作成した。

3. 結果と分析

以下では、被験者の属性を示した後、「はじめに」で述べた本研究の問いを扱う。なお、アンケート上の質問の順序と本稿で扱う順序は一致していない。

3-1. 被験者の特徴

(1) 属性：

被験者 63 人の平均年齢は 20.3 才であった。男子が 18 人 (28.5%)、女子が 45 人 (71.4%) である。

(2) フランス語会話の学習目標レベル：

フランス語ネイティブと同じ程度	フランス語圏で仕事や学業をする程度	フランス語圏で日常会話をできる程度	旅行をする際に困らない程度
12.7%	47.6%	38.1%	1.6%

以上が、被験者がフランス語会話を学習する目標レベルである。「フランス語圏で仕事や学業をする程度」が 47.6% であり、ほぼ半数を占める。「フランス語圏で日常会話をできる程度」が 38.1% であり、この二つのレベルが被験者の多数を占める。そして「フランス語ネイティブと同じ程度」が 12.7%、「旅行をする際に困らない程度」が 1.6% と続く。

(3) パソコンの習熟度（会話モジュールを使用するため）：

問題ない	時々問題がある	常に問題がある
66.1%	27.4%	6.5%

パソコンの習熟度については、フランス語会話モジュールを使用するという基準から回答してもらった。その結果、多数の者はパソコン使用に問題がないようである（66.1%）。しかし、4分の1の被験者は時々問題があると回答しており、少数ではあるものの、常に問題がある者もいる。

(4) 授業外における、会話モジュールの使用頻度：

週に2, 3日	週に1日	2週間に1日	ほとんどなし
7.9%	23.8%	30.2%	38.1%

6割程度の被験者は、授業外において会話モジュールをある程度使用する。「2週間に1日」程度が30.2%、「週に1日」程度が23.8%、「週に2, 3日」程度が7.9%である。しかし「ほとんど使用しない」と答えた者が38.1%であり、高い比率を占めている。

(5) (4で「ほとんどなし」と答えた人以外) 使用するダイアログ (複数回答を含む)：

授業で使用したもの	興味があるもの	学びたい表現があるもの	その他
58.9%	41.7%	25.1%	8.4%

前述の問いで授業外におけるモジュールの使用が「ほとんどない」と回答した者以外を対象に、使用するダイアログを尋ねた。なお複数回答を可としている。その結果、「授業で使用したもの」を58.9%が、「興味があるもの」を41.7%が、「学びたい表現があるもの」を25.1%が選択した。

(6) 授業への出席頻度：

ほぼ毎回	3回に2回程度	2回に1回程度	3回に1回程度	ほとんどなし
79.4%	17.5%	1.6%	1.6%	0%

授業の出席については、「ほぼ毎回」が8割程度を占める。「3回に2回程度」も17.5%であり、被験者の会話クラスへの参加率はかなり高い。しかし調査日の授業に欠席している者はアンケート調査に参加していないため、学科全体の出席率と一致するわけではない。

(7) 授業参加の積極性：

とても積極的	やや積極的	普通	やや消極的	とても消極的
9.5%	42.9%	33.3%	11.1%	3.2%

授業への参加は、「やや積極的」が42.9%、「普通」が33.3%であった。9.5%の「とても積極的」を含むと、積極的に参加する者が多いようである。しかし11.1%が「やや消極的」、3.2%が「とても消極的」と回答している。

以上が、本研究の被験者の特徴である。これより本研究の被験者は、フランス語会話学習目標レベル、パソコンの習熟度、授業外における会話モジュールの使用および使用するダイアログ、さらに授業への出席や参加における積極性において異なっていることが確認された。以下では「はじめに」で述べた4点について、これらの被験者のフランス語会話モジュールの評価について明らかにしていく。

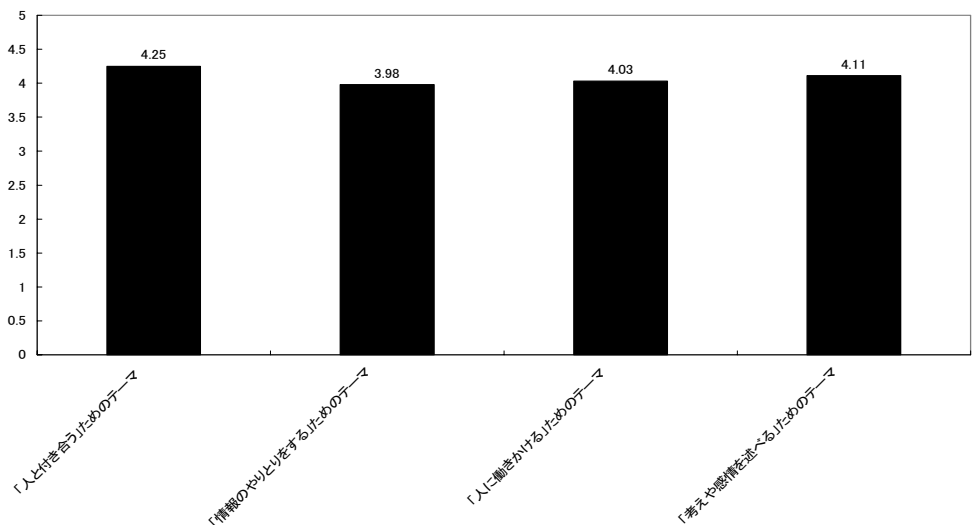
3.2. フランス語会話モジュールは、学習者のニーズを満たす教材か。モジュールの機能、使い勝手、ダイアログについて、学習者はどのように捉えているか。

この問いについては、機能、使い勝手、ダイアログという点より分析を行う。

(1) 機能：

会話モジュールの作成時、機能に関して、40機能の選定、機能の配列、4グループへの機能の分類などについて、多くの議論が重ねられた。(詳細は、結城2003, 2004a, 2004b, 松本2004を参照のこと)。そこで本節は、学習者であるモジュール使用者が機能についていかに評価しているかを扱う。

40機能は、「性質の似たものを集め」(結城2004b)、4つのグループに分類された。この分類は学習者の多様なニーズに対応することを目的としている。そこでこれらに分類された機能の数が、学習者にとって十分であるか評価してもらった。「とてもそう思う」が5点、「まあそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「全くそう思わない」が1点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせてから、平均点を算出した。結果は以下である。



この結果より、4つの分類に含まれる機能の数は、概ね学習者のニーズを満たすといえよう。そこで40機能に関するニーズを明らかにするため、各々の機能について、その必要度をたずねた。「学習する必要がある」が3点、「どちらとも言えない」が2点、「特に必要がない」が1点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせ、平均点を算出した。結果は、テーマごとに以下で示す。

1. 「人と付き合う」テーマの必要度（全体平均 2.81）

1. 謝る	3.00	6. 状況についてたずねる	2.85
2. 感謝する	2.98	7. 人を紹介する	2.74
3. 挨拶する	2.95	8. 注意をひく	2.66
4. 自己紹介する	2.90	9. 招待する	2.66
5. さよならを言う	2.85	10. 人にものをあげる	2.47

2. 「情報のやりとりをする」テーマの必要度（全体平均 2.78）

1. 場所についてたずねる	2.95	9. 特徴についてたずねる	2.75
2. 理由を述べる	2.95	10. 経験についてたずねる	2.71
3. 時間についてたずねる	2.92	11. 「しなくともよい」と言う	2.71
4. 金額についてたずねる	2.90	12. 数字についてたずねる	2.71
5. 手段についてたずねる	2.87	13. 程度についてたずねる	2.69
6. 「しなければならぬ」と言う	2.86	14. 能力についてたずねる	2.63
7. 例をあげる	2.78	15. 順序についてのべる	2.56
8. 比べる	2.76		

3. 「人に働きかける」テーマの必要度（全体平均 2.84）

1. 要求する	2.97	7. 禁止する	2.86
2. 許可を求める	2.97	8. 「しなければならぬ」と言う	2.81
3. 依頼する	2.95	9. 指示する	2.75
4. 提案する	2.90	10. 「しなくともよい」と言う	2.67
5. 「しないでくれ」と言う	2.86	11. 招待する	2.63
6. 助言する	2.86		

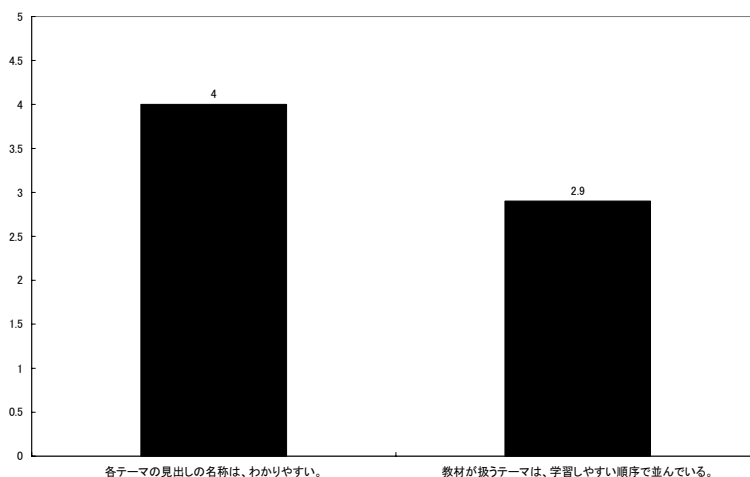
4. 「考えや感情を述べる」テーマの必要度（全体平均 2.80）

1. 意見を述べる	2.95	5. 予定を述べる	2.78
2. 理由を述べる	2.94	6. 妥協する	2.70
3. 希望を述べる	2.92	7. 条件をつける	2.68
4. 好きなものについて述べる	2.79	8. 好きな行動について述べる	2.65

これより、40 機能は「学習する必要がある」と全体的に高く評価を受けており、4つの分類間にも必要度に関する差異はほとんどない。さらに、被験者のニーズを詳細に把握するため、「フランス語会話を身につけたいレベル」および「授業外におけるモジュールの使用頻度」とのクロス集計を行ったが、大きな差異はみられなかった。松本、金、梓沢、幸松（2005）によると、学習者のレベルにより会話機能に対するニーズは異なる。だが、本研究の被験者はフランス語専攻の2年生であることから、フランス語レベルに大きな差異はなく、ニーズにおける差異がみられなかったのであろう。

自由記述においても、「テーマが豊富なところがよかった」、「テーマ別になっているのでとてもわかりやすい」とあり、積極的な評価を受けている。一方、「もっとテーマの数が増えれば、今後独学するにあたって、ありがたい」という意見もあるが、これは今後の学習におけるモジュール使用を示唆し、積極的な評価と捉えられよう。

次に機能の見出しについてであるが、作成時に、「ユニットでの話題・タスクがどのような実際の機能を担当しているか」という観点より決定された（松本 2004）。そこで見出しのわかりやすさ、および見出しが並ぶ順序について質問した。



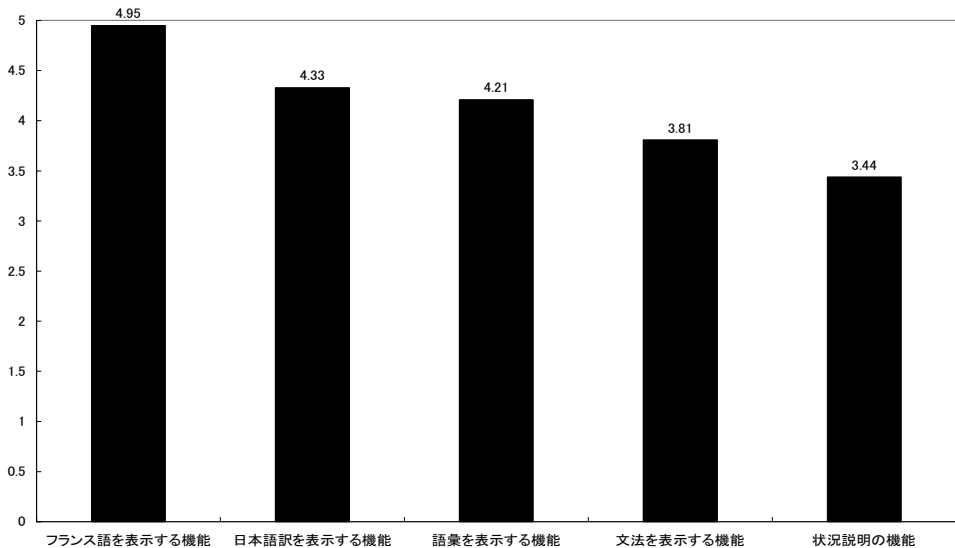
テーマの見出しは概してわかりやすいと捉えられている。しかし機能の配置に関する評

価は高くない。会話モジュールには「授業用」と「学習用」の二つのタイプがあるが、それぞれの分類の仕方や配置順序が異なるため、学習者が混乱した可能性がある。

(2) 使い勝手：

会話モジュールは、学習者の多様なニーズに適応するよう、学習用のページにさまざまな機能や学習モデルを設置している。それらは、学習者のニーズにいかに応じているのか。また、パソコンを用いた教材である会話モジュールの使い勝手についても明らかにする。

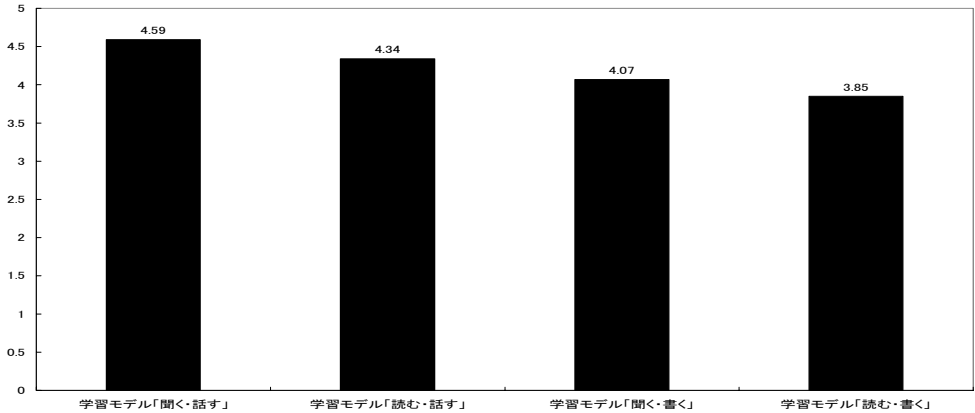
まず、個人の学習用のページに常に表示されている5機能の必要性についてたずねた。「とても必要である」が5点、「やや必要である」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまり必要ない」が2点、「全く必要ない」が1点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせ、平均点を算出した。結果は以下である。



この結果より「フランス語を表示する機能」に対するニーズが最も高いことがわかる。何を言っているか、またそれが何を意味するかを知ることは、会話を学ぶ学習者にとって重要だからであろう。「日本語訳」や「語彙」についても比較的ニーズは高いが、これは会話を理解し実践に結び付けていく上で必要とされるからと考えられる。文法や状況に関する機能にもニーズはあり、会話学習を補助する機能として評価される。

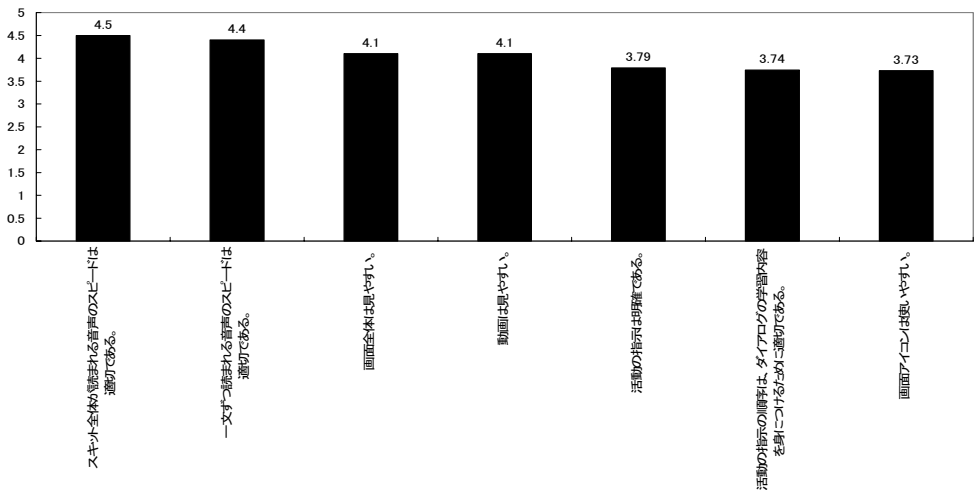
次に学習モデルについてであるが、学習用ページにはダイアログごとに4つのモデルがある。学習者は、使用の際にこの中から1つ選択しなければならない。そこでモデルの必要性について質問した。「とても必要である」が5点、「やや必要である」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまり必要ない」が2点、「全く必要ない」が1点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせてから、平均点を算出した。結果は以

下である。



モジュールは、会話の学習を目的として設計されている。そのため4つの言語能力のうち、会話の習得にもっとも必要とされる「聞く・話す」能力を伸ばすことを目的とするモデルを、学習者は使用する傾向がある。同時に、会話においてあまり必要ないと捉えられる「読む・書く」を目的とするモデルのニーズがもっとも低い。

その後、授業外でフランス語会話モジュールを使用すると答えた被験者に対し、モジュールの使い勝手について質問した。「とてもそう思う」が5点、「まあそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「全くそう思わない」が1点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせてから、平均点を算出した。結果は以下である。

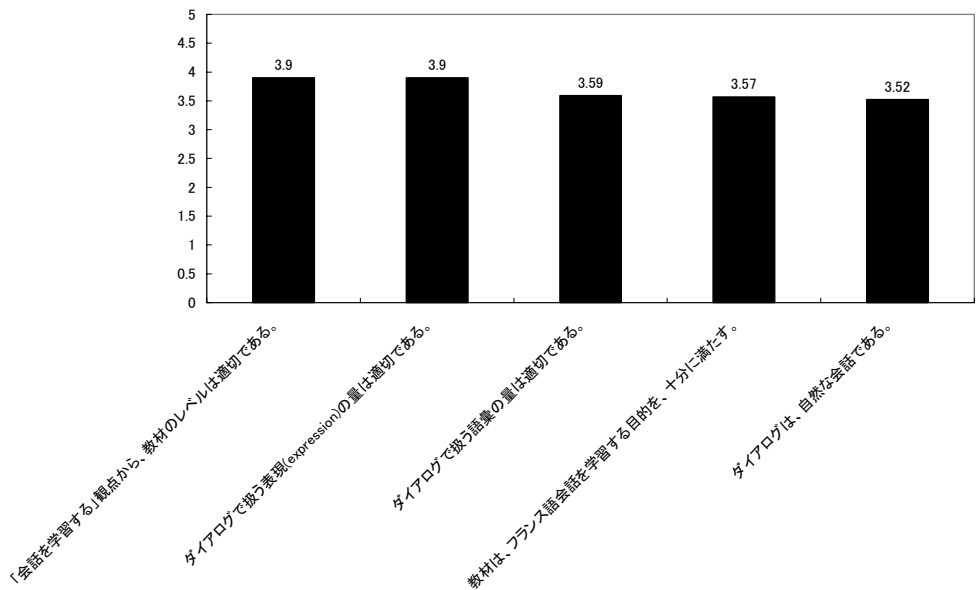


これより、音声・動画・画面については適切と評価されていることがわかる。活動の指示についても、特に問題はなさそうである。ただし実際に、モジュールの指示に従った学習を、学習者がどの程度行うかという疑問は残る。なおこれらに関する自由記述はほとんどなかった。

(3) ダイアログ：

会話モジュールの各ダイアログは、談話が自然に展開され（松本，2004）、発話機能と場面が統合しており（松本，2004）、言語構造をおさえた（阿部，2004）うえで、自然な会話であるように作成された（ダイアログの作成についての詳細は、松本 2003 を参照のこと）。ダイアログは 10 文から構成されている。本節では、ダイアログに関する評価を扱う。

以下の 5 項目について、「とてもそう思う」が 5 点、「まあそう思う」が 4 点、「どちらとも言えない」が 3 点、「あまりそう思わない」が 2 点、「全くそう思わない」が 1 点として、問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせてから、平均点を算出した。結果は以下である。



以上のようにダイアログに関するニーズについては、概ね積極的な評価である。しかし 5 項目すべてにおいて、平均が 4 点を切っていることに注目しなければならない。ダイアログについては、多数の自由記述があったので、それらを参照しながら理解を深めていく。

モジュール教材に対する積極的な評価は、大きくふたつに分けられる。ひとつは、会話モジュールが「動画・音声を使った会話学習教材」であることである。たとえば、「会話の様子を見られる、聞ける、繰り返せるのがよい」、「動画・音声で、生の会話が身につく感じ

が好き」, 「何度も繰り返して, 自分に合わせて学習できるところがよい」などの記述がある。もうひとつは, モジュールが「自然な会話」を扱っていることである。これについては, 「会話の流れは自然だし, 覚えやすい」, 「自然な会話のゆとり慣れる点で有効」, 「ストーリーがおもしろく, 発音やジェスチャーも分かる」とある。しかし, 「話の内容が実生活とかけ離れているときもあり, そのときはわかりにくかった」という記述もあり, ダイアログの自然さに関する評価については個人差もみられる。

一方, 被験者がフランス語を専攻とする2年生終了時であることから, 物足りなさを感じる者も少なくない。まず教材のレベルについて, 「難易度が高くていい。2年目にしては物足りない」という意見が数人の記述にみられた。その上で, 「フランス語を新たに始める人が簡単な表現から学べるようなダイアログ(とその順序)と, フランス語既習者が更に深く学べ, 復習できるようなダイアログ(とその順序)とが別になっていればよいと思う。個人のレベルに応じて学習できるようなものにしてほしい」という提案もある。さらに表現・語彙についても, 「扱う表現や単語の量をもっと増やしても問題ないと思う」, 「ニュアンスなどの違いとともに, 感情表現をたくさんつけてほしいと思った。語彙も, ニュアンスや使う状況などの違いも知れるといい」という指摘がある。しかし, 「フランス語の基本となる表現が身についた」, 「会話モジュールに出てくる表現は話すときに使いやすい」という積極的な意見もある。これより, 会話モジュールの表現・語彙に関して積極的に捉えるものの, 応用的な表現や語彙も学びたいというニーズがあることがわかる。

以上, フランス語会話モジュールに関する学習者のニーズをみてきた。モジュールの機能は概ねニーズと合致し, 40機能や機能を分類する4つのグループは, 積極的評価を受けている。またモジュールの使い勝手については, 会話を習得するために必要とされる基本的な機能(例: フランス語を表示する機能など)に, 高いニーズがみられた。そしてダイアログは, 会話を学習するための教材として積極的な評価を受けていることがわかる。しかし, 本研究の被験者の中には, 自らのフランス語レベルという観点より会話モジュールに物足りなさを覚える者がいることも明らかになった。それでは次に, 授業教材としてフランス語会話モジュールがどのような評価を受けているかについてみていく。

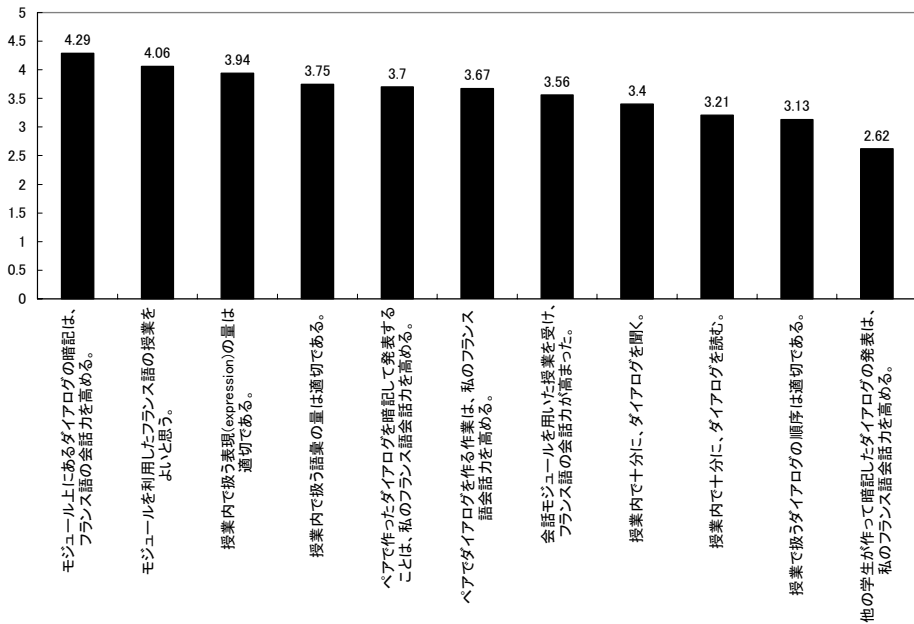
3.3. 授業教材として, フランス語会話モジュールはどのように活用できるか。

本調査は, フランス語を専攻する2年生を対象に, 学年の終了時に行った。彼らは1年間, フランス語ネイティブスピーカーによる「フランス語会話」の授業の中でモジュールを使用してきた。授業は毎回同じ形式で行われた¹。授業に関するアンケートの項目は, 授業担当者からの活動に関する説明および筆者の授業観察に基づき, 作成をした。なお, アンケート実施前に, 授業担当者に質問項目の適切性に関して確認している。本節は, モジュールを使用した授業評価を明らかにし, 今後の授業の改善を目指す。

回答方法については, 「とてもそう思う」が5点, 「まあそう思う」が4点, 「どちらとも言えない」が3点, 「あまりそう思わない」が2点, 「全くそう思わない」が1点として,

¹具体的な活動については, 本書所収のルーセル・中田「TUFPS 言語モジュールを用いた授業」を参照されたい。

問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせた後、平均点を算出した。結果は以下である。



この結果から、授業でモジュールを利用することは、概して積極的に捉えられているといえよう。特にダイアログの暗記、扱う表現や語彙についての評価が高い。会話の授業であるため、特に会話に必要とされるこれらの活動に対するニーズが高いのであろう。しかし表現語彙は4点を切る。前節で述べたように、被験者はフランス語を専攻する2年生であるため、もっと多くの表現や語彙の扱いを望んだのであろう。そのためモジュールの授業を受け会話力が上がったという項目の評価において、少々積極性に欠けたと推測される。

2限目の授業では、ダイアログの作成と発表を行う。ペアでダイアログを作成し、それをクラスで発表し、教師からコメントをもらうという一連の活動は会話力を高めると、ある程度の評価を得ている。しかし他の学生の発表に関する評価については、消極的である。クラス全員が発表するため、この活動は授業時間の多くを占める。何らかの改善が必要とされているのであろう。

また、授業内でダイアログを「聞く・読む」という活動もあまり積極的な評価を受けていない。ダイアログの暗記や扱う表現・語彙など、モジュールそのものに対する評価を考慮すると、ダイアログの学習に対するニーズは高く、ダイアログをもっと詳細に授業において扱う必要もあろう。

授業に関する自由記述には、ほとんどの被験者が意見を寄せている。1年間授業を受けてきたため、多くの意見があったのであろう。以下では、積極的評価と消極的評価に分け、授業評価をみていく。

まず積極的な評価からである。広い視点から、「授業への参加意欲が高まった」、「授業を休んでも、自分でパソコンを使って授業内容を確認できるので役立つ」などと評価されている。具体的には、モジュールを授業教材として用いることにより、テーマ性がある授業になったとの評価がある。たとえば、「毎回のテーマが明確でわかりやすく、授業の統一性が出た」、「ネイティブの意見をじかに聞けるし、毎回テーマが定まっているので、進行具合はよかったと思う」という記述があった。さらに、語彙や表現を習得したと考えている。「暗記して実際に表現が身につくし、ペアでダイアログを作るのも、いろいろな語彙や表現が勉強できてよい」、「表現を覚え、流れを知る点ですごくよい」などと述べられている。

次に、授業においてモジュールを使用することに対する消極的な意見である。まず、モジュールは独学可能という意見がある。「会話モジュールは授業外でも使えるので、授業で使用する時は、個人で使う時にはできないことをしてほしい」、「モジュールの学習は自宅でもできるので、授業ではいろいろな会話の表現を耳にしたい」などの記述がある。また、ネイティブスピーカーらしさを生かしきれていないという意見がある。「ネイティブの先生にはもっと自由にしゃべってほしい。雑談のとき、考え方や物の見方、文の抑揚などを知るのに一番役立ったように思う」、「ネイティブの先生方がいらっしやるのだから、自由に会話や討論をした方が、会話力が身につくのではないか」などとある。さらに、モジュール教材のレベルが物足りないという意見がある。「週に2時間という貴重な会話の授業をモジュールのダイアログだけで終わらせるのはよくない。2年生にとっては少し簡単」などの意見がある。

受講した授業に対する以上のような意見以外にも、自由記述には、今後の授業の改善に向けた提案が多くあった。これはアンケート時に教室にいたネイティブスピーカーの教師が、その旨を依頼したためであろう。これは、大きく5つに分けられる。まずは2限の授業で行うダイアログの作成や発表についてである。「会話を作ると、新しく出てきた表現が定着する気がする」、「他の学生が作ったダイアログ発表について解説があるといい。いつも完全に理解できないまま終わってしまうので」などとある。また、「話す・聞く・読む・書く」という言語能力を伸ばすための活動を行うという提案もある。「ダイアログを詳しく時間をかけて読み、ペアで作業した方がいい」、「もっと聞くことに重点を置いた方がいい」、「もっと発音練習を重視してほしい」などの意見である。さらに「語彙や表現、文法」に関しても提案がされている。「会話モジュールのダイアログを発展させた表現、類似表現か語彙を補完してほしい」、「言語学習は暗記だと思うので、授業でもどんどん暗記するのがいいと思う。そのため、文法事項も多く盛り込んだ方がいいと思う」などの記述があった。また実践的な会話能力を伸ばすために、「即興での会話を取り入れたらいいのでは？苦戦したり、対応力を身につけられればいいのでは」、「フランス人の先生とコミュニケーションの時間を増やした方がいい」などの提案もある。最後に、前述の消極的な評価の理由にもあったが、もう少しレベルが高い教材を使用してほしいという提案があった。

最後に、授業評価と、授業参加における積極性のクロス集計を行った。質問用紙では回答に5段階を提示したが、人数のばらつきがあったため、「とても積極的」「やや積極的」という回答をまとめたグループ、「普通」と回答したグループ、そして「やや消極的」「と

でも消極的」という回答をまとめたグループ、計3グループの比較とした。それをグラフ化したものが以下である。

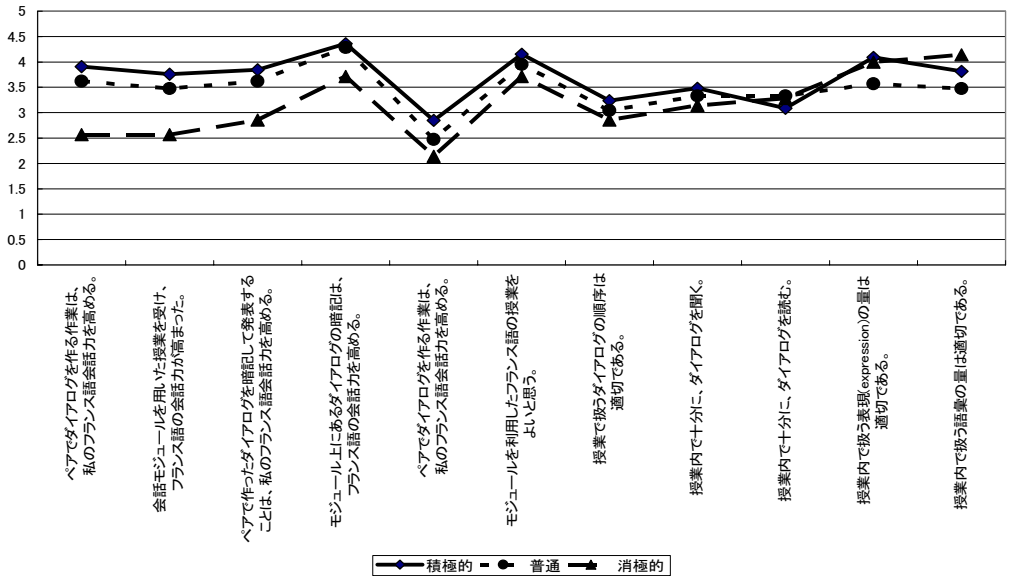


図 1 授業参加における態度に応じた、授業に対する考え

この結果より、授業に積極的に参加していたと考える者の方が、モジュールを使用した授業の活動を積極的に評価する傾向があることがわかる。語彙や表現の量については、授業に消極的であった者の方が適切と捉えているが、授業に積極的であった者は、自らの学習のために、語彙や表現の量が多ければいいと考えたのであろう。

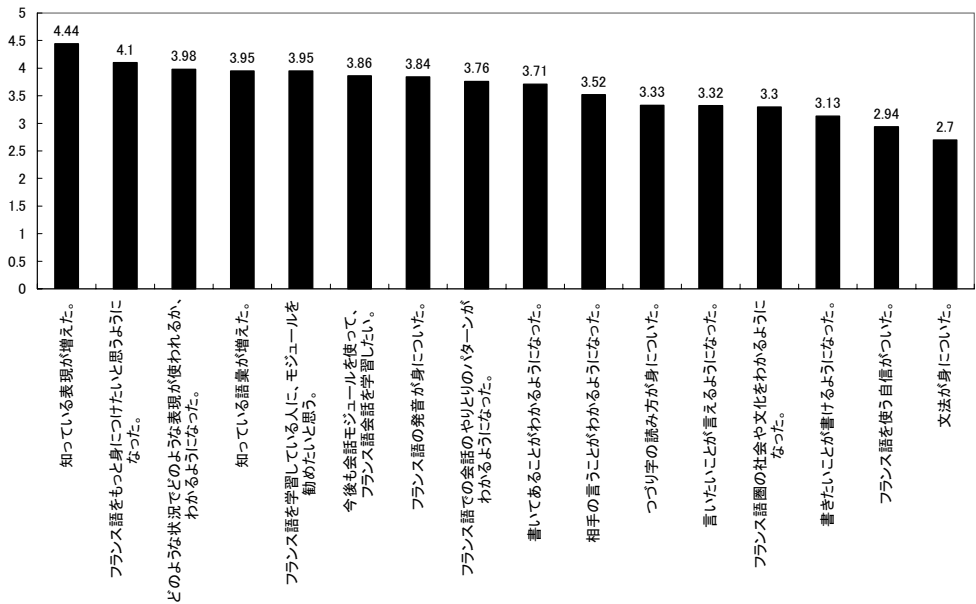
以上、フランス語会話モジュールを、いかに授業において活用できるかという点よりみてきた。全体的に、会話の授業においてフランス語会話モジュールを使用することについては積極的であった。しかし消極的な意見や今後の授業に向けた提案より明らかにされたように、被験者にはそれぞれさまざまなニーズがある。そのため、授業受講者のニーズや言語能力などを把握して、フランス語会話モジュールが学習者にとって有効な教材となるよう、さらなる工夫が必要とされる。

3.4. フランス語会話モジュールは、学習者のどの能力を発達させることが可能か。

現実に即した文脈、実際に使用される表現を組み込むフランス語会話モジュールの授業を1年間受け、また授業以外の学習においてモジュールを使用することにより、被験者はどのような能力を身に付けたと考えているのであろうか。本調査では、言語能力の発達と言語学習における動機付けの発達という点から質問をした。

回答方法については、「とてもそう思う」が5点、「まあそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「全くそう思わない」が1点として、

問いごとに点数をつけ、それに答えた人数を掛け合わせた後、平均点を算出した。結果は以下である。



言語能力について、バックマン等（バックマン, 1997; バックマン&パーマー, 2000）は、意思伝達言語能力（communicative language ability）とは、構造的知識（organizational knowledge）と語用論的知識（pragmatic knowledge）から成ると定義する。構造的知識は、発話や文を構成するために必要であり、文法的知識とテキスト（発話や文のまとまり）についての知識から成り立つ。語用論的知識は、発話や文を言語使用のコミュニケーション上の目標や言語使用の設定の特性に関連づけるために必要であり、機能的知識と社会言語学知識から成り立つ。このような言語能力の構成を考慮すると、以上の結果から、フランス語会話モジュールを使用することにより、会話に特有な能力が発達したと被験者が自己認識をしていることがわかる。「表現」や「語彙」という構造的知識、および「状況に従った表現の使い方」という語用論的知識の習得という、会話に必須と捉えられる能力が高い評価を受けているからである。実際、語用論的知識に相当する「やりとりのパターン」の習得についても、評価は低くない。一方、これらの能力と比較すると、文法のおよびテキストに関する個々の能力（つまり「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」、「文法」、「発音」、「つづり字の読み方」）に関する自己評価はあまり高くない。しかし、これらの能力を伸ばすことが、会話の学習や授業におけるニーズとしてどの程度求められているか疑問である。

またモジュール使用は、フランス語学習への動機を強めることに貢献している。「フランス語をもっと身につけたいと思うようになった」、「フランス語を学習している人に、モジュールを勧めたいと思う」、「今後も会話モジュールを使って、フランス語会話を学習し

たい」という項目について、比較的肯定的な回答がみられる。外国語学習における動機付けについて、Gardner (1985) は、学習言語に対する態度や動機は、言語の習得に重要な役割を果たすと述べる。つまり学習動機が強ければ、それは学習行為に結びつき、言語の習得へとつながるのである。しかし「フランス語圏の社会や文化がわかるようになった」、「フランス語を使う自信がついた」という項目はあまり評価が高くなく、実際の会話にはさらに学習や実践が必要と捉えていることから、モジュールは、今後の継続的なフランス語学習に、学習者を結びつけたといえよう。

しかしフランス語能力に関する項目は、あくまで自己評価によるものである。そのため実際にこれらの能力がどの程度発達したのかはわからず、さらに個人により評価の基準が異なることに注意しておく必要がある。

次に、これらの言語能力と学習動機を、フランス語会話の学習目標レベルと授業参加への積極性とそれぞれクロス集計を行った。結果は以下であった。

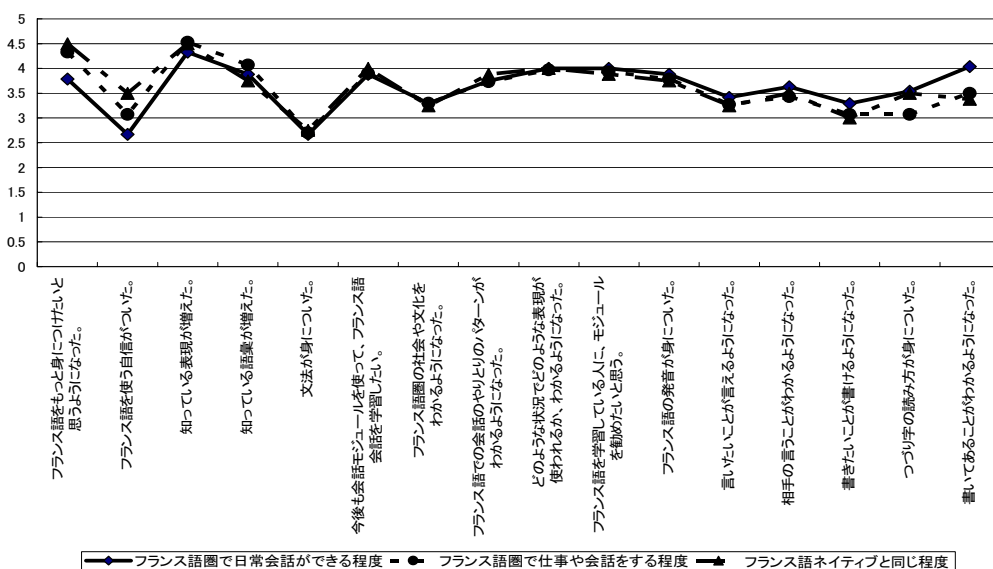


図 2 フランス語会話における学習目標レベルに応じた、フランス語力と動機の変化

会話の学習目標レベルに応じた、フランス語能力と動機の変化についてであるが、フランス語会話を高いレベルで習得したい者の方が、「フランス語をもっと身につけたいと思うようになった」「フランス語を使う自信がついた」などフランス語習得の動機を高めており、表現や語彙を身につけたと捉える傾向がある。一方、「書いてあることがわかるようになった」「つづり字の読み方が身についた」をはじめとする個々の言語能力については、フランス語圏で日常会話をする程度のレベルでフランス語を習得したい者の方が習得したと評価していた。なお、「旅行をする際に困らない程度」を回答したのは1名のみであったため、クロス集計の対象から除外している。

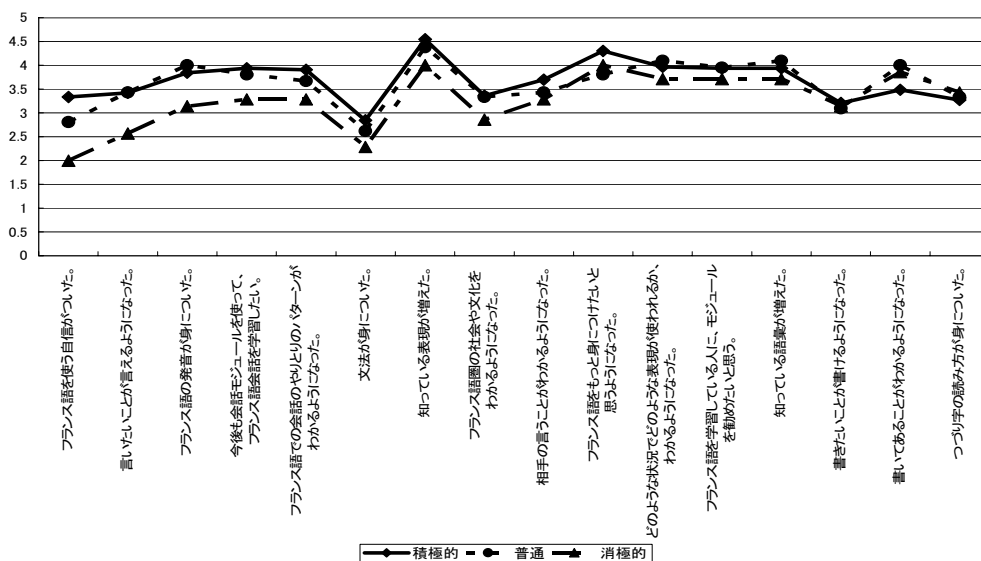


図 3 授業参加における態度に応じた、フランス語力と動機の変化

次に授業参加の積極性に応じた、フランス語力と動機の変化についてであるが、授業に積極的に参加したの方が、消極的に参加した者と比べ、ほとんどの項目においてフランス語力が伸びたと捉えている。なお質問用紙では回答に5段階を提示したが、人数のばらつきがあったため、「とても積極的」「やや積極的」という回答を1つに、「普通」、そして「やや消極的」「とても消極的」という回答を1つにまとめ、3グループの比較としている。

3.5. 会話モジュールはどのような学習者に向いているのか。

本節では、会話モジュールおよび会話モジュールを使用した授業は、どのようなタイプの学習者に適しているか、モジュールの使用頻度および学習目標との関連性から分析をした。以下では、差異がはっきりと見られた結果を示す。

まず、フランス語を身につけたい程度が、授業外におけるモジュールの使用頻度といかなる関係にあるか、クロス集計を行った。なお、「旅行をする際に困らない程度」を回答したのは1名のみであったため、対象から除外した。

	週に2, 3日	週に1日	2週間に1日	ほとんどなし	合計
フランス語ネイティブと同じ程度 (n=8)	50%	25%	0%	25%	100%
フランス語圏で仕事や学業をする程度 (n=30)	3.3%	30%	23.3%	43.3%	100%
フランス語で日常会話ができる程度 (n=24)	0%	16.7%	50%	33.3%	100%

表4 フランス語会話を身につけたい程度×モジュールの使用頻度（授業外）

この結果より、会話能力を高く身につけたい者の方が、授業外においてモジュールを頻繁に使用する傾向がわかる。彼らが会話学習の教材として、フランス語会話モジュールを有効だと捉えているといえよう。フランス語圏で仕事や学業をする程度の者の方が、フランス語で日常会話をできる程度の者よりも「ほとんどなし」の比率が高いが、「週に2, 3回」および「週に1日」という頻繁にモジュールを使用する者の比率は高くなっており、概して会話能力を高く身につけたければ、モジュールを使用する傾向があるといえよう。

次に、パソコンの習熟度（モジュール使用を基準として）が、授業外におけるモジュールの使用頻度といかなる関係にあるか、クロス集計を行った。

	週に2, 3日	週に1日	2週間に1日	ほとんどなし	合計
問題ない (n=41)	12.2%	24.4%	34.1%	29.3%	100%
時々問題がある (n=17)	0%	23.5%	23.5%	52.9%	100%
常に問題がある (n=4)	0%	25%	0%	75%	100%

表5 パソコン習熟度×モジュールの使用頻度（授業外）

これより、パソコン使用に困難がある者は、モジュールを使用しない傾向が高いことがわかる。そのため個人がモジュールを用いて学習をするためにはある程度、パソコンに習熟していることが求められる。ただし、パソコン操作に熟達していることが、授業外におけるモジュール使用に結びつくわけではない。

そして、フランス語を身につけたい程度が、授業中の態度といかなる関係にあるか、クロス集計を行った。なお上記と同様、「回答者が1名であった旅行をする際に困らない程度」は、対象から除外した。

	とても 積極的	やや 積極的	普通	やや 消極的	とても 消極的	合計
フランス語ネイティブと 同じ程度 (n=8)	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	0%	100%
フランス語圏で仕事や 学業をする程度 (n=30)	10%	56.7%	30%	0%	3.3%	100%
フランス語で日常会話を できる程度 (n=24)	8.3%	20.8%	41.7%	25%	4.2%	100%

表6 フランス語会話を身につけたい程度×授業参加態度

これより、会話能力を高く身につけたい者ほど、モジュールを使用する会話の授業に積極的に参加する傾向がある。モジュールおよび会話の授業を通して、会話力を高めることを目指しているのであろう。

以上、学習目標やパソコン習熟度により、会話モジュールの使用頻度や授業への積極性が異なることが明らかである。

4. 結論

本稿は、会話モジュールそのものおよび会話モジュールを用いた授業に対する評価を扱った。東京外国語大学においてフランス語を専攻する2年生という、ある程度均質な集団を対象にしたが、彼らのフランス語学習目標やニーズは、個人により異なっていた。フランス語能力レベルも異なるであろう。そのような異なる学習目標やニーズ、言語能力を踏まえたうえで、個人学習であるにせよ、授業であるにせよ、会話モジュールをいかに効率的に利用するかを考える必要がある。どの学習段階においてモジュールを導入するのか、また授業で使用するならばモジュールをどのように、またどのくらいの進捗で扱うか、など具体的な配慮が求められる。なぜなら、それは学習者の言語習得および習得への動機付けに直接的に結びつくからである。

本研究の被験者は、会話モジュールを通して、会話的な能力が身についたと感じていた。しかし言語能力は、構造的知識や語用論的知識から成る包括的な能力であり（バックマン, 1997; バックマン&パーマー, 2000）、さまざまな分野から学習することが求められる。そのため学習者の言語能力を高めることができるよう、今後は他のモジュール（発音、文法、語彙）との関連性を強める必要があるであろう。

本研究の被験者からは、会話モジュールおよび会話モジュールを用いた授業について、比較的肯定的な評価が得られた。ただし彼らは東京外国語大学のフランス語を専攻する2年生であり、学習目的やニーズをとっても、日本におけるフランス語学習者において全体を表すわけではない。TUFS言語モジュールは、幅広いユーザーを対象に開発されているものである。そのため今後は、多様な背景をもつ学習者からの評価を得る必要があるであろう。

謝辞

本稿を執筆するに当たり、国立教育政策研究所の山森光陽氏および東京外国語大学の川口裕司氏から、貴重なご意見を頂戴した。ここに深く感謝の意を表する。

参考文献

- Bachman, L. F. (大友賢二訳) 1997: 『言語テスト法の基礎』, みくに出版, 東京. (原題 *Fundamental considerations in language testing*, 1990.)
- Bachman, L. F. and Palmer, A. S. (大友賢二・ランドルフ・スラッシャー訳) 2000: 『実践』言語テスト作成法』, 大修館書店, 東京. (原題 *Language testing in practice*, 1996.)
- Dick, W., Carey, L., and Carey, J. O. (角行之監訳) 2004: 『はじめてのインストラクショナルデザイン』, ピアソンエデュケーション, 東京. (原題 *The systematic Design of Instruction, fifth edition*, 2001.)
- Gardner, Robert. 1985: *Social psychology and second language learning: the role of attitudes and motivation*, Edward Arnold, London.
- 阿部一哉 2004: 「TUFSS D モジュール開発「試作版」ーサイトの構築と他モジュールとの関連性ー」, 『言語情報学研究報告』No.1:95-101, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 川口裕司 2004: 「TUFSS 言語モジュール」, 『言語情報学研究報告』No.1:15-20, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 周育佳 2004: 「ユーザーから見る日本語発音モジュール」, 『言語情報学研究報告』No.1:75-88, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 藤原愛 2004: 「発音モジュールの評価シート分析 2. ドイツ語, スペイン語, ベトナム語, 日本語」, 『言語情報学研究報告』No.1:63-74, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 松本剛次 2003: 「TUFSS-D モジュールにおけるスキットの位置づけとその作成に関する考察 - 初級日本語教材における会話スキットの現状と課題, 及び TBLT (Task Based Language Teaching) の考え方と近年の談話分析の成果を踏まえて - 」, 『外国語教育研究』No.6:21-36.
- 松本剛次 2004: 「初級日本語教科書のシラバス分析と TUFSS-D モジュールの設定試案及びその妥当性に関する考察」, 『言語情報学研究報告』No.1:83-93, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 松本剛次, 金銀美, 梓沢直代, 幸松英恵 2005: 「大学場面で必要とされる会話の種類をその横断的推移についての一考察 - 日本語学習者の会話ニーズ調査の結果より - 」, 『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』基盤

(B) (2) , 319-353.

山森光陽 2004a: 「発音モジュール評価の結果分析」, 『言語情報学研究報告』 No.1 : 45-49. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.

山森光陽 2004b: 「発音モジュールの評価シート分析 1. フランス語」, 『言語情報学研究報告』 No.1 pp. 51-61. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.

結城健太郎 2003: 「機能シラバスにおけるユーザーの視点から見た機能分類」, 『外国語教育研究』 No.6:53-67.

結城健太郎 2004a: 「D モジュール開発のための場面シラバスと機能シラバスに関する基礎調査」, 『言語情報学研究報告』 No.1:75-81, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.

結城健太郎 2004b: 「D モジュールに関する機能 40 とその分類枠組み」, 『言語情報学研究報告』 No.1:103-113, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科

ルーセル フランソワ, 中田俊介 2005 「TUFUS 言語モジュールを用いた授業 - 東京外国語大学フランス語専攻の試み」, 『言語情報学研究報告』 No.10 : 133-153. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.